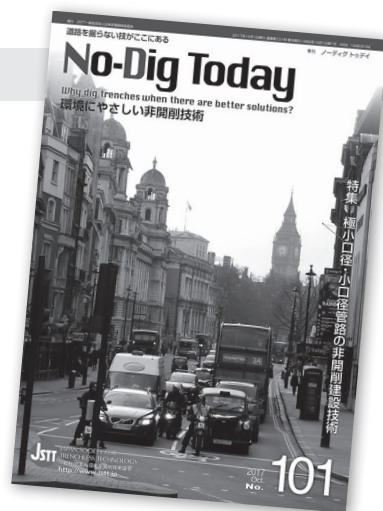
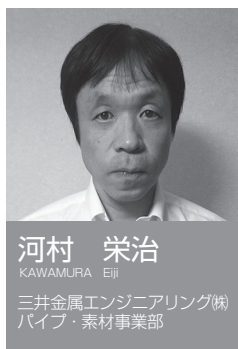




特 集の中でも重きを置かれた位置計測技術は、いずれも非開削技術における不断努力を感じさせられる内容でした。地下埋設物は増える一方であり、特に都市部ではC.C.BOXの導入も盛んに検討されています。支障が増えれば非開削技術の出番ですが、正確な計測ができなければそれは事故にも直結します。技術競争によりさらに精度の高い計測が可能になり、非開削技術の活躍の場が発展していくことを心より祈念しております。

イベント報告は各国・各現場の特徴が色濃くリポートされ非常に興味深いものでした。石油パイプライン網の構築やネズミに起因する道路陥没といった日本では見られない事象も数多く取り上げられていますが、技術に国境が無い以上、どこで自分が直面するとも限らないと感じました。今後も「No-Dig Today」を通し最新の技術に触れることで、業界に携わる者としての感性を磨いていけたらと思います。



No. 101の特集「極小口径・小口径管路の非開削建設技術」ですが、各工法の図や写真がカラー掲載で施工実績の具体例の紹介もあり、たいへん理解しやすい内容でした。

各工法で共通している課題として、施工環境の難易度が年々アップしているなかでのコスト低減と品質の向上が求められており、呼び径250mm以下の壁を乗り越えるべき関係者の努力を痛感しました。

そのなかで今後の取り組みのひとつとして、熟

練工の技術を数値化し、推進工事において熟練オペレーターの勘を統合するシステムの作成というのに興味をもちました。

将来の労働人口の減少が懸念されるなかで、このようなシステムの確立は建設業界に関わらずどの産業においても不可欠な事と考えます。将来の有効活用を期待しております。



2 017年4月より機械系専門商社に入社し、勉強の一環として10月号より拝読させていただいております。文系の大学出身ということもあり、入社するまで建築・土木とは無関係の日常生活を送っていました。その為、土木というと大きな機械で大雑把に穴をあけてインフラを整備の一翼を担っているという大まかなイメージしか持っていなかったのですが、施工環境への対応・価格面やお客様のニーズに応えるため、繊細な計算を行い様々な取り組みを行っていることを、本誌を

通じて学ぶことができました。

数式や聞きなれない単語、名称ばかりで理解しがたい部分が多かったのですが、読み進めると身近に感じられるようなコラムや展示会での様子が写真付で掲載されていたので、メリハリ持ちながら読み進めることができました。

非開削技術の今後の発展を楽しみに毎月購読させていただきますので宜しくお願い致します。